



元素から

究極の美に迫る

MOA 美術館館長 内田篤呉氏

『紅白梅図屏風』は尾形光琳の代表作であるとともに、江戸中期の日本美術の最高傑作で、国宝に指定されています。画面の中央に水流を、左右に紅白の梅を大胆に配した捨象的な構図は、日本意匠の一つの完成形といえます。紅梅と白梅、老木と若木、静と動、直線と曲線などの対比を意図的に用いて、画面に緊張感を生み出しているのも見事です。光琳梅と呼ばれる花卉を線描きしない梅の花、大胆にデフォルメした水紋などは日本の伝統的なデザインの到達点ともいえます。

この作品は美術的価値が高く評価される一方、材料や技法などに不明な点がありました。一体どのように描かれたのか。日本美術史上大きな謎でした。そこで2004年から2005年にかけて蛍光X線分析装置などを使った第1次科学調査が実施されました。蛍光X線分析とは、X線の照射によって該当箇所の元素の種類と量を測定するものですが、結果はちょっと首をかしげたくなるものでした。というのも、金地の部分は金箔だと考えられていたのですが、それにしては金の検出量が少なすぎました。また金箔と金箔の重なり部分の箔足はくあしとそれ以外の部分の値に差がなく、さらに銀が使われていると想定されていた水流部分は、実際のところ銀がほとんど検出されませんでした。謎がさらに深まる調査結果となり、論争が続きました。



国宝『紅白梅図屏風』(こうはくばいざびようぶ) ©MOA美術館
尾形光琳作 江戸時代18世紀 二曲一双/サイズ各156.0×172.2センチ

約10年後の第2次科学調査では、蛍光X線分析や粉末X線回折などを実施しました。結果は第1次と大きく異なるものでした。金を叩いて金箔にする原子配列が変化します。金地部分を調べると、その配列は金箔と同じパターンであることがわかりました。また箔足の部分を分析すると、第1次のときと違って金の量に差があることも判明しました。同様に水流の銀色からは銀箔の配列パターンが検出され、波模様の黒色からは硫化銀が検出されました。もともと波模様の技法は諸説あって、銀を硫黄で化学変化させたという説もその一つでしたが、それが実証された形となりました。

現在、『紅白梅図屏風』は全体に金箔と銀箔を用い、波は銀を硫黄で燻煙して描いた可能性が高いというのが定説となりました。第1次と第2次で調査結果が異なったのは、分析装置が10年の間に進化したことが大きな要因だったようです。いずれにせよ『紅白梅図屏風』の科学的解明が進んだことの意義は大きいと思います。将来的な保存修復においても有益ですし、琳派として日本の美を確立させた光琳は、現代人の美意識にも大きな影響を与えています。光琳を深く知ることは、私たち自身を知ることだとも言えるのではないでしょうか。(談)

◆
尾形光琳(おがた・こうりん) 1658~1716
江戸中期を代表する絵師。雅で優美な伝統を感じさせる描写のなかに、斬新な構図や画面展開を取り入れ、後代に琳派と呼ばれる革新的な独自の様式を確立した。

内田 篤典(うちだ・とくひこ)

1952年東京都生まれ。慶應義塾大学卒業。MOA美術館に勤務し、2007年同大学より美学博士授与。文部科学省文化審議会専門委員、世界文化遺産・無形文化遺産委員を務める。